

20 成人鼠径ヘルニアにおける最も優れた手術術式はあるか

蛭川 浩史・多田 哲也

立川総合病院外科

【はじめに】PHS法, mesh-plug法, Lichtenstein法で, 術者の技量, 術式による差を検討。

【対象と方法】2005年1年間に手術を行った成人鼠径ヘルニア123例を対象とし3方法の経過を検討。

【結果】Lichtenstein法, PHS法, Mesh-Plug法はそれぞれ, 22病変, 76病変, 17病変に対し行われ観察期間は1か月から12か月で全例に再発なし。3方法で手術時間, 術後合併症の頻度に差はなし。鎮痛薬使用量はLichtenstein法で有意に少量。術者の学年, 助手により手術時間に差あり。

【結論】Lichtenstein法はPHS法, Mesh-Plug法に比し, 術後疼痛が少ない可能性があるが, 長期経過を検討要す。しかし, 術者, 助手のなれた方法による手術が最も有効な術式かもしれない。

をきわめる。腸型脂肪酸結合蛋白(I-FABP)は分子量15kDaの細胞可溶分画中の蛋白質であり, 小腸上皮に特異的に存在する。新潟大学は大日本住友製薬と共同でヒトI-FABPの酵素免疫測定法を開発し, 血液中のI-FABPの微量定量測定を可能にした。2005年11月より, I-FABP測定の小腸虚血診断への有効性を検証する多施設共同臨床試験を開始した。実施施設は新潟大学およびその関連9施設である。急性腹症患者を対象に患者登録を行い, 血清I-FABP濃度を測定する。3月23日現在, 参加10施設全てから計122例の登録が行われ, 症例集積はほぼ順調に進行している。2006年10月までに300例の登録を終え, 同時にデータ分析を行う予定である。

21 血中ヒト腸型脂肪酸結合蛋白濃度測定キットの臨床的有用性に関する多施設共同臨床性能試験 — 研究背景と進捗状況

神田 達夫・塚原 明弘・西村 淳

谷 達夫・田宮 洋一・廣田 正樹

田島 健三・山崎 俊幸・酒井 靖夫

植木 匡・多田 哲也・藤井 博

舟岡 宏幸・大軽 靖彦・畠山 勝義

DP-810 研究グループ

絞扼性腸閉塞など小腸虚血の診断は今なお困難